
僕の魔女

元村有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の魔女

【Nコード】

N3606S

【作者名】

元村有

【あらすじ】

「小さなレディ。君のご両親は人に名乗りを求めるならば自分から名乗るべきだという礼儀すら教えてくれないの？」

幼いミリーの問いかけに青年から返ってきたのはこんな皮肉に満ちた言葉だった。

ミリーが皮肉屋な青年を鎖から解き放つまでのお話です

1話 僕のための魔女（前書き）

3話完結予定です。

2話目から視点がころころ変わるのでご注意ください。

1話 僕のための魔女

1回目

「あなた、だれ？ このもりにははいっちゃだめなんだよ」

聞こえてきた声に意識を向けると5、6歳ほどの小さな少女がこちらを丸い大きな瞳でじい、と見つめていた。柔らかそうな髪がふわりと揺れている。将来美人になりそうな子だった。

「小さなレディ。君のご両親は人に名乗りを求めるならば自分から名乗るべきだという礼儀すら教えてくれないの？」

「……れいぎ」

意味が分からないなりに馬鹿にされているのが伝わったのか、少女はムツとした顔をした。

「僕の名前が知りたいなら君の名前をまず、僕に教えるべき、というんだよ」

「ミリーのなまえ？ ミリーだよ」

「そう、ミリー。僕の名前はレオナルド・リオッド・マクスクリン・レレンダー・オズドル・ワズイルダム」

「れおな……」

「それじゃあ、女性の名前だろう。もう一度言ってあげるよ。レオナルド・リオッド・マクスクリン・レレンダー・オズドル・ワズイルダム」

「れおなると・りお……っで？」

「レオナルド・リオッド・マクスクリン・レレンダー・オズドル・ワズイルダム」

「ながいー。レオじゃダメなの？ おぼえられないよー」

ふにゃ、と眉を下げてねだってくる。可愛いね。

「レディ・ミリー？ 初めて会った男を愛称で呼びたいだなんて、大胆な子だね？ もちろん、ダメだよ」

「えー……じゃあ、もういい」

ぷっくり膨れたほっぺはずいぶんと柔らかそうで、思わずつついてみたくなる。

「もういい？ ミリー。君、自分から僕に名乗りを求めておいて、覚えるのが難しいだなんて理由で投げ出すつもりかい？ なんて呆れた子なんだろうね。まあ、この程度も覚えられないような馬鹿なら仕方ないと諦めてあげてもいいよ」

「うう、ミリー、ばかじゃないもん」

「そうなの？ じゃあ、馬鹿じゃない証拠に、ちゃんと僕の名前を言っごらん。レオナルド・リオッド・マクスライン・レレンダール・オズドル・ワズイルダムって。言えるようになったら、馬鹿じゃないって認めてあげるよ」

「うー……れおなるとど・りおっど・まくくら……」

「はい、また間違えたー」

大きな瞳に涙が盛り上がる。さて、ミリーはいつまで頑張れるかな。



2回目

「あー、レオナルド！」

聞こえてきた声に、顔を上げると柔らかそうな茶色い髪の子が駆け寄ってくるところだった。見覚えのある子だ。

「いた、見つけた！」

「やあ、ミリー」

記憶にあるよりも、少し大きくなったようだ。以前よりも目線が高くなっている。

「どこに行ってたの？ ミリー、レオナルドの名前、忘れそうになっちゃってたよ」

そういえば以前、きっちり名前をフルネームで覚えさせてから返したんだった。意外と根性がある子だったと感心したんだ。

「へえ、忘れそうになっちゃってたんだ。じゃあ、まだ覚えてるよね。僕の名前を言ってごらん？」

「えーっとね。レオナルド・リオッド・マクスクレイン・レンダール・オズドル・ワズルイダム」

僕は聞えよがしにため息を吐いた。

「全然違うよ。すっかり忘れちゃったようだね。薄情な子だな。レディ・ミリーは」

「え？ あれ？ ちがう？」

「レオナルド・リオッド・マクスクレイン・レレンダール・オズドル・ワズルイダム。ほら、言っごらん？」

「んと、レオナルド・リオッド・マクスクレイン・レレンダール・オズドル・ワズルイダム」

「全然だめ。まったく、やっぱり君は馬鹿だね」

「ばかじゃない！ レオナルドがずっといなかったのがわるいんだもん」

「人のせいにするなんて、君という人間の高が知れるというものだね」

「うううー」

地団太を踏んで怒りを表現している。なんとも子供らしいことだ。昔から思っていることだけど、改めて思う。子供は心を和ませる存在だ。

「ほら、言葉を発してごらんよ。でないと君、動物と一緒にだよ？

ああ、もしかして本当に動物なのかな。だから僕の名前を覚えておくことさえできないんだね？」

「ちがうもん！」

ミリーは高らかに異議を唱え、再び僕の名前を覚えることに没頭した。本当に、この愛すべき単純さには癒される。

3回目

「レオナルド・リオッド・マクスクライン・レレンダー・オズドル・ワズイルダム！」

久方ぶりに呼ばれたフルネームに目を開けると、半ば予想していた琥珀色の瞳が僕を迎えた。

記憶にあるよりも、また伸びた背丈が少女の成長と時間の流れを教えてくれる。

「言えた！ あってるでしょ！？」

「ああ、正解だよ。レディ・ミリー。ようやく僕の名前を覚えてくれたようで嬉しい限りだ。これでようやく、君を動物ではなく人間だと思えることができるというものだね」

「あたしは、最初から人間だもん」

唇を尖らせて主張する少女を動物だと思ったことは実際のところ一回もないが、それには勿論触れないで、意味ありげに微笑んでやると、少女は勝手な解釈でますます唇を尖らせた。鳥のくちばしのような。可愛らしい。

「ねえねえ、レオナルドってどうしてここにいるの？ ここ、うちの家族以外入れないっていうか入ったら迷うようになってる森なのに。それに、その鎖は？ 何か悪いことしたの？」

「いきなり僕が悪いことをしたと決めつけてくるなんて、レディ・ミリーの瞳は偏見に満ちているんだね。僕は深く傷ついたよ」

「え、ご、ごめんなさい。」

「いや、謝ってもらわなくて構わない。ただ、君の瞳に映る僕がどれほど歪んだ存在であるかなんて、知りたくなかったかな」

芝居がかった仕草で目を下に向ける。軽いジョークのつもりだったのだが、ミリーは慌てて僕の肩に手を触れようとして、その勢いそのまま僕の座る木の根元に頭を打ち付けた。

「い、痛いー。レオナルド、透けてると思ってたけどやっぱり触れないんだ」

「予想してたなら、それなりの行動を取った方がいいと思うよ」
反射的に受けとめようとして宙に浮いた手を気付かれないように下ろした。手首に繋がれた鎖が重い音を立てる。

「レオナルドって、幽霊なの？」

「さあ？ 僕に聞かれてもね」

これは本当だ。僕は僕が誰であるかは知っているけれど、僕が何であるかは知らない。幽霊なのか。人間なのか。それとも他の何かなのかさえ分からない。

「お母さんにも聞いたんだけど、レオナルドのことは知らないって言うの。それなのに、危ないからもう近付くな、って言うんだよ」

「それは君のお母様が正しいよ。安全かもわからない存在に近づくなんて、賢い者のすることじゃない。つまり、君はやっぱり馬鹿ってことだね」

「レオナルドはそればかり！ そんなにあたしのこと馬鹿にしたいの！？」

「君よりも年長の存在として、君が馬鹿にならないように注意を促してあげてるんだよ」

「馬鹿っていう、レオナルドが馬鹿！」

捨て台詞とともにミリーは去って行った。もう会うことはないかもしれない。別れの度に思ってた来たことだが、3回目ともなると次を少し期待してしまう。だが、どちらにしろ、次に誰かと言葉を交わすのはまた年単位で先の話になるだろう。

時間の感覚があいまいになってどれほど経つのか。自分がここに繋がれてからどれほど経つのか僕には分からない。

分からないままに、意識はまた閉じていく。次に目覚めるとき、また少女の言葉で目覚めることができるのだろうか。意識が途切れる前にと、僕は懐に手を入れた。

4回目

「レオナルドの馬鹿!」

「……………」

ミリーの声で目を開けた。息が触れるほど近くにミリーらしき顔がある。

少し距離を取ってみれば、ずいぶん前より成長したようだった。成長期がすでに来ているのだろう。髪も簡単にだが結われているし、年頃の娘に近づきつつある容貌になっている。まだまだ子供の範囲だが。

「馬鹿!」

空けた距離を詰められてもう一度距離をあける。背中が木に当たり逃げ場がない。そう言えば、この木には触れることはできる。土にも、草にも。だが、偶然近づいてきた鳥に触れようとした時はダメだった。そしてこの少女を含め、人間にも触れられない。この違いはどこにあるのだろうか。

「レオの馬鹿!」

「……勝手に人の名前を省略するのはよくないと思うよ。ミリー」

「いいの! レオなんて、レオでいい!」

「よくないよ。君だってミ、なんて呼ばれたくないだろう? まるで自分の名前じゃないみたいで」

「そ、そりゃあ一文字まで略されたらそうだけど……!」

「そういうことだよ。本当ならフルネームで呼んで貰いたいところを、レオナルド、までで勘弁してあげているんだから、それ以上略すなんてずうずうしすぎると思わない?」

「う……」

「……そういえば君ちゃんと僕の名前を覚えているんだろうね?」

「お、覚えてるもん。レオナルド・リオッド・マクスクリン・レ

ンダール・オズドル・ワズイルダム、でしょ!？」

「違う。また忘れたね……？ 本当に君の頭の中はどうなってるのかな。あれだけ繰り返し教えたのに、何度も何度も間違えうし」

「そんなの……そんなの、レオナルドがいつもここにいないのが悪いんじゃない！」

いつもの調子に持っていこうとしたら、ミリーは耐えかねたように声を上げた。目が赤くなっている。

「いっつもそうやってあたしのこと怒らせて、気が付いたら帰らなきゃいけない時間になってるし。こうやって会えたと思った次の日にはいなくなってるし、いくら呼んでも探しても出てこないと思ったらいきなりいるし！」

「……」

「あたしがレオナルドの名前を一生懸命覚えて、紙に書いて何回も何回も暗唱して、それでこれで馬鹿にされないですむ、って思ってた探しても出てこなくて、諦めてたところに出て来たってちょっとくらい忘れちゃってもしょうがないじゃない！ そんなに言うなら、毎日ちゃんとここにいてよ！」

ぼろ、と大きな瞳から大粒の涙が零れ落ちた。

「……そしたら君は毎日会いに来てくれるの？」

立ち上がると鎖の重さで自然と手が垂れる。この鎖は僕の後ろの木に繋がっている。以前は僕の腕で簡単に囲えるほどだった幹は、どう腕を伸ばしても、もう囲い込むことはできない。

「この通り、僕はここから動けない。どこにも行けない。誰にも触れない。誰とも喋れない。君だけを待って、ずっとここに居ろって言うの？」

座っていれば、もう僕の目線よりも上にあった少女の瞳は、立ち上がればやはりまだまだ下で、幼い。

僕の言葉にか、それとも立ちあがった僕が予想よりも大きく見えて怯えたのか。少女は怯んだように視線をさまよわせ、口をつぐんだ。

背後の木に背をもたれかけた。

「あのね、ミリー。僕は、ここにいる。いつだって、ここにいる」
「うそ」

「君から見ればね。でも僕はここにいる以外の僕をもうずいぶん長いこと知らない。もしかしたら、君次第で君から見ても僕がここに居続けることは可能かもしれない」

ただ、僕にとってそれはいいことではないだろう。

誰にも触れられず、喋ることもできず、見つけてもらうこともできないでいる時間は、きつととても長く感じるだろう。

「君は、魔女の素質がある。僕を見つけたのがその証拠だ。なにやり、この森に自由に入ることができるのは、あの魔女の末裔だけのはず。……この森に呪いが解けていなければ、だけど」

「あの魔女？」

「僕を、ここに縛り付けた魔女——魔女・キーリ」



僕は、ワズイルダム王国の第5王子として生まれた。王位継承権からは遠かったから、ずいぶん自由が効く身分で、国から離れて色々な場所へ見聞を広めるのと外交のために飛び回った。

兄上たちも、能力的には僕に劣るところは多かったけど有能だったし、何より人を引き付ける魅力があった。カリスマ性っていうのかな。僕の有能さに王にならないかと言ってくる馬鹿もいたけど、王になることだけが自分の有能さを示すことじゃないって分かっていう僕は、丁重にお断りして、兄上たちにこういう馬鹿がいますよ、ということを伝えて場合によっては適当な処分をしたりしながら平和に過ごしていた。

だけどある日、1番目の兄上、つまり王太子に害虫——失礼。あの魔女が言い寄って来た。魔女といえば国にとって益をもたらすか害をもたらすか2つに1つ。ハイリスクハイリターンな存在だ。あ

る天災に見舞われた国は魔女によって救われたと聞く。ある大国は魔女によって滅ぼされたと聞く。

当然、兄上たちや父上、母上は勿論のこと、僕も出来る限りの情報を使ってその女を調べた。

出てきた結果は……本当に、馬鹿な魔女が王子に恋をした、というものだった。

といっても純粹に兄上に惚れて、兄上の役に立ちたい。あわよくば結婚してほしい。これは十分に国としては困ったことだ。王太子の結婚は国を挙げての一大事。できればそれなりの国とつながりを持つことができる政略結婚が望ましい。なのに、魔女がお熱を上げている男となると、魔女に恨まれたらと思われてそれも望めない。兄も含めて、家族全員が困った。大臣たちも困った。国民も、魔女を追い出すべきか応援すべきか困っていた。

みんなが困る中、兄想い、家族想い、国想いな僕が一肌脱ぐことにした。

つまり、その魔女を口説いて矛先をずらそうとした。第5王子の僕には国を支えるほどの良縁はそもそも望めなかったし、幸い1番目の兄上と僕は家族の中でも一番似ていたからやりやすいと思った。頑張っても振り向かない意中の人の態度に傷ついているところに、優しくしてくれる好きな男に似た、しかもその男よりも少し格好良くて、頭がよくて、しかもセンスもある男となるとね。まあ、揺れない方がおかしいよね。

そして、うまい具合に魔女を口説き落とした僕は、そのまま魔女の魔力を奪い取ろうとして――失敗して今に至る。

なぜ魔女の魔力を奪い取ろうとしたか？

それは、好きでもないのに口説いたことがばれそうになって、しかも呪いをかけられそうになったから。女の勘は馬鹿に出来ないって分かったことだけどしみじみと感じたものだよ。

でも結局それにも失敗して呪いをかけられてしまったというわけだ。



5回目

「レオナルドってサイテーだよね」

「そうかな」

体に丸みを帯びてきた少女は、小脇に古ぼけた本を持っている。木と僕の周りには不思議な図形が描かれており、ミリーがあれから魔法について勉強し、意図的に僕を呼び出したということはすぐに分かった。

「ちゃんと、理由を説明すれば分かってもらえたと思わないの？」

「確かに分かってもらえたかもね。でも、分かってももらえなかったかもしれない。分かってももらえなかったら、困るからね」

「だからって魔女を一方的に傷つけていいの？」

「自分の立場を考えずに、第一王子に言い寄ってくるからには相應の覚悟があつてしかるべきだよ」

「相手が王子様だからって好きな人に好きって伝えて、自分のことを好きになつてもらいたいって思っちゃいけないの？ 恋は理屈じゃないって言うじゃない」

「そんな身勝手、知らないよ」

ミリーは傷ついたような顔をして口をつぐんだ。

そんな顔は、小さいころからちっとも変わっていない。

「その本は？」

「……キーリさんの日記。レオナルドのことが書いてある。あと、この魔法陣のこととかも書いてあった」

「へえ。それは相当に色々書かれていたんだろうね」

生前は呪いをかけた後、顔も見せに来なかった。呪いをかけられる前にはもう声も枯らさんばかりに詰られた。簡単に心変わりするような気持ちで王族に近づいたからだよ、と言ったら激昂されて気

が付いたらこうなっていたのだ。

「本気で好きだったのに、って」

「そのひと月前には僕の兄を好きだと言っていたのに？ まったく説得力がないよ」

「そんな風に言わないでよ。なんなら読んでみる？ 本気だったって分かるんだから！」

「遠慮させてもらうよ。全く興味が無い。第一、君がいるってことは彼女は他の男と結婚して子供を産んだってことだろ？ 立派に立ち直ってるじゃないか。僕をこんなところに縛り付けておいて」

あ。とミリーが口を開けた。本当にミリーは馬鹿だなあ。

「そっか。そういえばそうだね。っていうかなんかごめんなさい」

「君に謝ってもらうことじゃないよ。謝るなら僕のこの状況をどうにかしてくれない？ さすがにもういい加減解放されたい」

「うん……」

ミリーと話すようになってから、麻痺していた僕の場合は随分と昔のものに戻っている。ここに縛り付けられた当初は、気が狂いそうになっていたことも思い出した。

縛り付けられてからは人と出会うこともほとんどなかった。ただでさえ人が来ない森の中なのに、そもそも僕が存在を認識できない人がほとんどだった。まれに最初に会った頃のミリーくらいの年頃の子は僕に気付いてくれたけれど成長するに連れて僕が見えなくなり、忘れてしまう。

しばらくしてから、人や動物が近づくとき以外には意識が途絶えるようになっていると気付いた時には心底ほっとした。ずっと意識を保ち続けてたままで狂わずにいられる自信はなかったからだ。でも、ミリーは何度も気付いてくれたから、その状況を手放してでもミリーとの繋がりを失くしたくないと思うようになった。いつか会った幼い子供たちのように、ミリーに僕が見えなくなってしまわないかと感じる不安に勝てなかった。

もしもミリーがいなくなった後、僕はどうなるのか。永遠にいな

くなるのか。それとも、ミリーがいなくても、意識が戻る可能性があるのか。その時、僕は自分を保っていられるのか。

あえてそこから思考を逸らす。考えていても仕方のないことを考えるのは、いまの僕には毒にしかない。

「ずいぶん自信がなさそうだね。もしどうしても無理ならこの木の前に住んで僕の暇つぶしに一生付き合うくらいの誠意はを見せてくれないよ?」

「え、さっきあたしが謝ることじゃないって言ったよね!? それに「誠意を見せてくれてもいいよ」!?　なんでそんなに上から目線なの!」

「でも君は謝ったじゃないか。つまり僕に対して申し訳ないと感じたってことだね?　だったら、それに相当することをしたいっていう想いがあるってことだ。だったら、そうしてくれてもいいよ、って言ったんだよ。それとも君がした謝罪は、その場の雰囲気で適当に言ってみたという種類のものなのかな?　だったらいいんだよ?　やっぱり君は言葉を正しく使えない馬鹿だって――」

「馬鹿じゃないってば!」

思うだけだよ、と続けようとしたところで反発が返ってきた。この子は本当に変わらないなあ。楽しい。癒される。なんて扱いやすいんだろう。

かくして、魔女・ミリーは僕の呪いを解くために全力を尽くすことを誓ったのだった。

2話　ひとり

あたしが作った魔法陣はかなり適当なものだったのだけど、ちゃんと魔法陣になったみたいだった。

あれからレオはちゃんと毎日本の根元に座っている。いきなり消えないし見えなくもならない。

金色の髪に、青い瞳でまるで王子様みたいな綺麗な人。実際に王子様だったと聞いて妙に納得したものだ。でも、そのイメージを裏切るような幼い子供にも容赦なしの嫌味ったらしい性格はインパクト抜群で、初めて会ったときから一度だって忘れることなんて出来やしなかった。

レオと初めて出会ったとき、あたしはうちの一族で管理しているこの森に冒険に来ていた。うちの直系以外が入ると奥まで入ることができず、気が付けば外に出てしまっているという不思議な森。成長してから考えてみれば、そんな森に幼い女の子が入るなんて無謀この上ないことだったと思う。でも、あたしは好奇心と冒険心の強い子供だったから、レオに出会うことができた。

「行ってきます」

森で取れる薬草を調合して薬にして売ってる我が家では、森に入ることができる母か私が薬草を取ってきて調合し、父が売り子をするという役割分担だ。特に最近は森に行つて薬を取ってくるのはもっぱら私の役目になっていた。森に行けば家で使うためとレオの魔法を解くのに使うための薬草両方を採つて来れる上にレオにも会いに行けるし。

「ミリー。気を付けて行つておいで」

「はい」

店番をしている父に返事をして外に出る。青空の下、清々しい風が気持ちいい。

今日は森のどのあたりを探そうか、いままで行ったことのない南

西の方がいいかもしれない。ちょっとじめつとしていて薄暗いので避けていたけど、こんなにいるいい天気の日ならいつもよりもきつとマシな光景になっているだろう。



25回目

「やあ、レディ・ミリー。おっと、今の君にはどう考えても『レディ』は相応しくないね。虫食いのある葉を髪飾りにするようじゃね」
開口一番、いつもの嫌味があたしを出迎えた。

誰のためにあたしが草の間に頭を突っ込んだり木登りしたりして
ると思ってるの！

……とは言わない。レオの呪いを解くために必要な薬草を集めているのは、レオのためでもあるけど、キーリのやり過ぎに対する償いでもあるからだ。

「……おみやげ」

とはいえ毎回のように嫌味を言われていれば仕返ししたくもなる。私は手に包んでいたものをレオに向かって放った。それは「ゲコ」とないてレオの方へ跳ねていく。期待していた通りに、レオは嫌そうな顔をしてその蛙を避けた。

「……っ！　なんてものを持つてくるんだ君は！　せめてもっと目に美しいものにしようと思わないの？　少しは大人になったかと思っただけどやっぱり子供だね。手土産に嫌がらせを持つてくるなんて！」

いつになく言葉に勢いがある。内容に、ではなくて口調に。思っていた以上に蛙が苦手なようだ。鳥には触れないと言っていたから蛙にも触れないだろうし、もしかしたらなんとも思わないのではな
いかと思ったけれど、予想以上に効果があったのを感じて嬉しくな
る。幼いころに苛められた恨みが晴らされた気分だ。

「ちよっと！　これを遠くへやってくれ！」

なぜかレオの方へと近づいて行く蛙を必死に避けながらレオは右往左往している。鎖があるから一定距離しか動けないため、逃げるのも苦しいんだろう。

ふと、いつもレオが座っていて隠れている幹の根元にいくつかの疵が付いていることに気がついた。自然に着いたものじゃなく刃物かなにかの跡だ。

「レオ、これ――」

「うわぁ、来るな！」

いつもの冷めた顔からは考えられない反応に、思わず嘔き出し疵のことをすっかり忘れてしまったあたしは蛙をもう一度捕まえて手に囲った。帰りに元いた場所に戻してこよう。

ようやく蛙から逃れて一息ついていいるレオの手首と足首に掛けられた鎖を見る。

残念ながら母にも父にも魔法に関する知識はなかったため、私はキーリの残した本から魔法を学んでいる。そこからわかったのは、レオが『狭間』に入ってしまったっていることだ。世界と世界の狭間。

そこに入ってしまったものは戻ってくるできないと言われている場所。原理はよくわからないけど、たぶんレオはあたしの魔力の影響を受けてこちらの世界との繋がりを持つことができている。

だからあたしに見えるし会話することもできていたんだと思う。今は魔法陣で固定しているがらしばらくはこの状態が続くと思うけど、もしかしたらそのうちまた『狭間』へ行ってしまうかもしれない。

その前にどうにかしないといけない。

ただ問題は、あたしがキーリと同レベルの魔法を使うことはすごく難しいってことだ。

キーリの時代に比べれば、魔女の使える魔法はずいぶん小さく、簡単に言えばしょぼくなってる。時代の流れとか言われているけど原因は知らない。ただ、わかるのは普通に魔法を使ってもレオにかけられた呪いを解くことはできないということだ。だから、あたしは薬草やら魔法具やら色々準備をしてできる限りキーリに近い魔法

をえるようにできないかと試行錯誤している。

憎らしい嫌味男だけど、あたしにとっては失いがない奴だ。

幼い頃からのレオを見返してやると思った時、言い過ぎたと思つて謝りたかつた時、レオをいくら探しても見つからなかつたときの寂しさはあたしの体に染みついてしまっている。

だから、皮肉屋で嫌味で小さい子供にも容赦なく性格の悪い憎つたらしい男でも、いなくなって欲しくない。

両手がふさがっているから思いつき頭を振ると、パラパラと葉っぱが落ちて行つた。

「取れた？」

「……そうだね、レディ、のレの字くらいにはなつたよ。あとは顔の泥を落として、破れたりほつれている服を繕つて、髪に櫛を通せば僕もようやく君をレディと呼べるかな」

「……ミリーでいい」

レオはやれやれ、と芝居がかった仕草で肩をすくめる。

「妥協は人を墮落させるよ、ミリー」

そして初めて会つたときから変わらない、一部の隙もない容姿を見せびらかすように鮮やかに笑つた。

馬鹿にされているとわかるのについ見惚れてしまつて、あたしは、それを誤魔化すために両手を開いて蛙を放つたのだつた。



30回目

今日もあたしは家の仕事を手伝つて森の薬草を探してから、レオの元へと向かう。

「そういえば、レオは何ができるの？」

「何って？」

「農作業とか、売り子とか」

言った瞬間にとっても馬鹿な子を見るような目をされた。レオは、
こういう人を不愉快にさせる方向でとても感情表現が上手いと思う。
勿論ほめてない。

「そんなもの、王子だった僕がやったことあるわけないよ。そんな
ことも分らないなんてミリーは馬鹿だなあ。また僕の名前を勝手に
略しているし」

「馬鹿って言わないでよ！ いいじゃない。レオナルドって長いん
だもん。レオが駄目ならレオナって呼んでやる！」

「それじゃあ女性の名前じゃないか。いくら僕が君より美しいから
って、女性の名で呼ばれるのは遠慮したいね。それともまさか君、
僕のことを女性に見えるの？ 頭だけじゃなくて眼も悪いんだね」

「レオが男だってことくらいわかってるってば！ 話そらなさいで
よ。ねえ、じゃあ特技とかは？ 体力には自信があるとか、声が大
きいとか、剣が使えるとか、物を売り込むのが得意とか」

レオは少し考えるように首をひねった。

「それなら基本的に交渉ごとは得意だったかな。相手の弱みを握っ
たり適当に操って自分を上位に持ってくるのは基本だよな」

「弱み？ ……まあいいや。そこは聞かなかったことにする」

「具体的には――」

「いいから！ あ、交渉ごとが得意なら、何か商売関係がいいのか
な」

交渉事が多そうな職業って言うとな商売人のイメージだ。うちみた
いな村人相手にしか商売してないのと違って、大きな町の商売人だ
けど。でも、商売人はこんな人を不愉快にさせることにばかり長
けた人に向いた仕事とは思えない。他にはあるかな。

「いったいなんの話？」

「んー、レオに出来る仕事は何があるのかなって思ってた。呪いを解
くことができれば、レオは普通の生活を送ることになるでしょ？」

そしたらご飯だっているし住む場所だっていいし。まあ住む場所は
この森に住み続けることができそうならいてくなくても構わないけど、

食いぶちは稼いでもらわないと、大の大人養えるほど家に余裕なし」

「……………仕事、ね」

「ちゃんと仕事が見つかるまでは、家においてあげられるようにお母さんたちに頼んであげるから大丈夫だよ。お母さん面食いだし、お父さんもお人よしだからきつと大丈夫」

「なるほど、君は両親の両方の性質を受け継いだわけだ？」

「ちよつと！ あたしは別に面食いでもお人よしでもないから！」

「でも、きみ僕の顔好きだろ？」

う、と思わず詰まる。確かに、レオの性格はどうかと思うけど、顔はいいと思う。眺めているのも嫌いじゃない。長い睫毛も宝石みたいな瞳も、通った鼻筋も、キラキラ光る髪の毛も。レオほど格好良くて綺麗な人をあたしは知らない。

「それに、君はお人よしだよ。それこそ馬鹿みたいにお人よしだ」

そう言ったレオが、嫌味とか嘲りとか呆れとか、そういうものを含まない珍しいほど柔らかく笑うものだから、あたしは一瞬呼吸を忘れそうになってしまった。でもそれはすぐに意地悪そうなものに変わってしまう。

「ほら、やっぱり面食いだしね」

顔が真っ赤になるのが分かった。



ふと思い立って、父に質問してみた。

「ねえねえ、お父さん。ワズイルダム王国ってここからどのくらい離れてるの？」

「ワズイルダム王国……ああ、サブリールか」

「サブリール？」

「ワズイルダム王国は隣国と統合して当時の王様の名前から、サブリールという国になったんだよ。確か今から50年くらい前だった

かな。それがどうかしたのかい？」

「……あ、ううん。なんでもない。ちょっと気になっただけ」

あたしはなんだかとてもびっくりしてしまった。

今まで、レオからしか聞いたことのないワズイルダム王国が本当に実在していたことにも、そして、その国がもうないことにも驚いた。レオの言葉を疑っていたわけじゃない。だけど森の中でしか会えないレオとの時間は、どこか現実感がなかった。

でも、レオの国は本当にあって、きっとレオは本当に王子様として生きていて。そして魔女キーリのせいでもう二度と国に戻ることはできなくて王子様にもなれないんだと——今、ちゃんとわかった気がする。

それに、お父さんの話からレオがああ場所に縛り付けられてから少なくとも50年が経っていることになる。下手するともっともつと長い時間だ。もし国に戻ったとして、レオのことを分かる人はいらるのだろうか。……おそらく、いない。

あたしはただ、ずっとああ場所にいなきやいけいことや、存在自体がこの世界から無くなってしまいかもしれないことしか気付いていなかったけれど、魔女キーリがした一番ひどいことはきつと、レオの帰る場所を失くしてしまったことなんだ。

あたしはそこまで考えて、レオと仕事についての会話をしたことを思い出した。あの時、レオは気付いていたのだろうか。もう王子としての務めをすることはないこと。

そこまで考えてあたしはいてもたってもいられなくなった。

「ちょっと森まで行ってきます！」

「あ、ミリー。今日は雨が降りそうだから早めに帰ってくるんだよ」「はい」

お父さんの言葉に返事をして、家を飛び出した。

レオになんて言えばいいのか分からない。ただ、顔が見たかった。



魔法陣おかげなのか、あれから僕の意識は途絶えることはない。日に一度、ミリーが来るとき以外はぼーっとして過ごしている。予想していたことだが、暇だ。

ミリーは森に来るたびに他愛のない話をして帰っていく。呪いのことに触れないところをみると、進展がないのだろう。それは仕方ない。そうすぐに状況が改善されるとは思っていない。

しかし暇だった。ミリーをからかって遊ぶことだけが今の僕の生きがいなのだ。ミリーがいない時間は暇でしかない。

暇というのはよくないと思う。かつては暇な時間なんてなかった。退屈なことはあっても、やることがないということはなかった。スケジュールは常に埋まっていたし、空いていれば何かしらの予定をいれることができた。

だが、そんな日々はもう二度と来ないかもしれない。

あの日々からどれほどの月日が経ったのかは分からない。ただ、木の樹齢から考えて、100年近くは経っている。僕の知っている人はきつと――誰ひとり生きていない。

だから暇は嫌だ。あえて考えないようにしていたことなのに。あえて気がつかないようにしていなことなのに、気が付いてしまった。目に涙がせり上がってくるのに気がついて、膝を抱えて顔を隠した。まるで小さな子供のようだ。こんなところ、ミリーには見せられない。

ミリー。

今日はまだ来ないのだろうか。今は来てほしくないけど。この涙が完全に止まるまでは来ないで欲しいけれど、早く来てほしい。

ミリーがいなくなったら、僕はどうなるのだろうか。この魔法陣を消せば、以前のように意識を無くせるだろうか。そしていつか完全にいなくなることができるようだろうか。

正直なところ、また呪いをかけられる前と同じように生きることができるとは思っていなかった。ただ、はつきりさせたかった。こ

の生きているのか死んでいるのかいないのかわからない存在であることをやめたかった。だから、ミリーが、僕が生きていけることを前提で話していたのには戸惑った。ミリーのことだから、呪いを解けば元に戻ると楽観的に考えた結果なんだろうと思う。だから、根拠があることじゃないんだろう。きっとそうだ。そうでなければ、僕は途方に暮れてしまう。

僕を知っている人がいない世界で、僕はどうやって生きていけばいいのかわからない。

ぼつり、と雨が降り始める。木の下で、ああ、これなら雨に濡れたと言えば誤魔化せるかなと、考えた。

ミリー。まだ来ないのかな。



木の合間から、レオが見えた瞬間、あたしは声を上げようとして咄嗟に呑みこんだ。

レオは、膝に顔を埋めて蹲っていた。こっそりと近づくと、肩が震えていて、泣いているんだと分かった。

分かってしまったら近づくことなんてできなかった。きっとレオは泣き顔なんて見られたくない。特にキーリの末裔の顔なんか、きつと見たくない。

あたしはその場所から動けなかった。レオの弱弱しさがなんだかとても申し訳なかった。見てはいけないものを見ていると思った。でも、その姿から目を離せない。

レオが泣きやんだら、いつもの調子に戻ったら話しかけよう。そうしたらいつもみたいに何気ない話をして、いつもよりも頑張って薬草を集めて、キーリの本も調べて頑張るから。

そんな言い訳は、レオを見た瞬間、なんだか飛んで行ってしまった。

雨の降ってきた空を仰ぐように顔を上げたレオの顔は、頬から涙

は零れていたけれど瞳にはなにも映っていないまるで世界に一人きりになってしまったような顔をしていて――あたしは、駆け出した。森に向かって。

一刻も早く、レオを解放しなきゃいけない。そう思った。

3話 1カ月と10年

31回目

「レオ」

久しぶりに見たミリー痩せていた。どこか見覚えのあるローブを羽織っているが、頬のこけは隠せない。僕は少し迷っているものの僕の台詞を選んだ。

「ミリー。最後に会ったときから何度陽が昇って沈んだと思っているの。暇つぶしにちゃんと付き合ってくれるという約束を忘れた？

まったく、君は本当に馬鹿だよ」

ミリーがいない間の狂いそうなほどの寂しさは、絶対に見せないと決めていた。いったい何度、この僕を囲む魔法陣を消そうとしたか分からない。それでも、そんなことは絶対に言うものかと思っていたし思っている。僕を目覚めさせた小さな女の子に、そんなみっともない僕は見せなくなかった。

彼女がどうして僕のもとに来なかったのか予想が付いているからこそ、なおさら。

「レオ。魔法、完成したよ」

そう言ってミリーが見せたのは、透明な筒に入った不気味な色の液体だった。もう一つの手に持った長い木の枝で、僕を囲む魔法陣に何かを書き加えていく。

「……それ、本当に解くための魔法？ さらに呪いをかける魔法じゃない？」

おどろおどろしい呪いを掛ける瞬間に立ち会っている気分だ。

「大丈夫……な、はず」

「はず……？」

「掛けた本人に直接聞いたわけじゃないし、解呪の方法だってちゃんとした手順まで書いてあるのはなかったの。でも、たぶん合って

る」

「そういうときは自信がなくても自信があるように見せかけてくれない？　とても不安になったよ」

「大丈夫任せてレオ」

「完全な棒読みだ。」

「君はハッタリの才能がないね」

「別にいらないもん」

そう言っている間にもミリーは準備を終えたようだ。ミリー自身も魔法陣の中に入ってきて僕に先ほどの液体を渡した。手をすり抜けてしまうのではないかと少し不安だったが、持つことができた。

「はい、飲んで」

「飲む！？」

いっそ手を素通りしてしまえばよかったのに、と思わず考えた。

「そう、それをレオが飲んで、それからあたしが魔法をかけるの」

「これどうしても飲まないといけないの？　こんな不気味な色の薬、飲んだら一瞬で死んでしまいそうだよ？」

「大丈夫。あたしも飲んだけど死んでないし」

こうまで言われると飲まないわけにもいかない。

覚悟を決めて、その怪しい液体に口を付けて一気にあおった。

「……っ……っぐ」

吐きそうだ。

「吐いちゃダメだからね！」

涙目になりながらも胃から逆流しそうな液体をなんとか押し込む。

「……っは！　こ、こんなひどい味のものはじめて飲んだよ……！」

「そお？　あたしは何度かあるけどな。風邪薬とかきつついよ」

「その風邪薬はぜったいに飲みたくないな……」

ミリーはぐったりする僕を見て面白そうに笑った。

「これで狭間へ行ってもしばらくは大丈夫。じゃあ、行くよ」

「ちよっと待ってくれ。狭間へ行っても？」

「詳しい話は、向こうで話すから」

そう言いきるなり、ミリーは呪文を唱え出した。僕らを囲む魔法陣が点滅を始める。周囲の空気が色をなくすように変わっていく。ミリーの声が頭に響き、呪文が音としてしか聞こえなくなる。

「異界よ、我らを受け入れよ」

かろうじて分かったその言葉を最後に、懐かしい空気が僕らを包んだ。



一見何も変わっていないようで、違和感のある光景。森の中に息づくはずの命が感じられない、『狭間』の世界へ来ることができたのだと分かり、あたしは息を吐いた。

「成功かな」

「これは……」

覚えのある感覚なのだろう。レオは眉をしかめて周囲を見回している。

「うん、完全なる狭間の世界。例えば今、お母さんがあたしたちのいるはずの場所を見ても、お母さんはあたしたちを見つけられない。あたしたちも、お母さんを見ることができない。同じだけど、違う場所。それが狭間の世界、らしいよ？」

なにせキリーの書き残したもののから得ただけの知識なので、つい余計に一言加えてしまう。案の定、レオは嫌そうな顔をした。

「そういう人を不安にさせることは言わないでって言ったよね？」

……まあいいけど、これからどうするのか、僕はこれからどうなるのか、教えてくれるよね？」

「うん。あのね、キリーの残した日記や魔法書から分かったことは3つあるの。」

1. 呪いを解くためには、一定の手順を踏み、かつ呪いに込められた以上の魔力を持つ者によってそれを打ち壊すしかない。そして、その手順は一応分かっていること。

2. レオに掛けられた呪いは、異界へとその身を閉じ込めるものであること。

3. レオの状況が常に異界にないことから分かるように、呪いはおそらく不完全なものであること」

「……色々聞きたいことはあるんだけど、とりあえず。手順は『一応』分かっている、とか呪いは『おそらく』不完全なものであるとか、曖昧な表現が多いのはどうして？」

「それはキーリの日記に書いてあったことなんだけど、感情に任せて呪いをかけてしまったせいで失敗があったみたいなの。だから、ちゃんとした呪いとは違うものになってしまっただけでキーリ自身すら解くことができない呪いになってしまったって」

レオは呪いをかけてから一度もキーリは会いに来なかった、と言ったけれど正確には来ることができなかったのだ。あたしが最初に読んだ日記は、キーリが呪いをかけた直後に書いたもの。そしてその後に見つけた本には、でもそれから数年後、そろそろ許してあげようと思ひ呪いを解こうとした。そして自分の失敗に気がついて、呪いを解くために研究を始めたことが書かれていた。

「家に残っていたのはキーリの研究の一部だけだったけれど、あたしたちを囲む魔法陣だって、キーリがやったときには何も起こらなかったらしいし、時間の流れとともに呪いが弱まり始めているんだと思う。どんな呪いだって、時間の流れとともに劣化するし、かけた本人がもう死んでいるならなおさらね。だから、一部の研究の結果からでも今なら通じると思う」

一応確認のために、レオが繋がれている鎖めがけて杖代わりの枝で思い切り叩く。魔力を込めた枝に負けた鎖にはパキ、と音を立ててひびが入った。弱まったキーリの呪いよりもあたしの魔力が上回ったってことだ。これならいける。

レオはひびが入った鎖を驚いて見つめ、そしてため息を吐いた。

「キーリが僕のために、だなんて……意外だよ」

「意外って、レオの状況を考えれば当たり前じゃない？」

「君はキーリを知らないからそう思うだろうけど、キーリって本当に自分勝手です。まるで自分を女王様だと勘違いしているような女性だったんだよ。そりゃあ兄の前ではしおらしくったけど、キーリを気にいらない女官たちのこまごまとした嫌がらせにも10倍返しは当たり前のようにしていたし」

本気で首をかしげているレオナルドは心底不思議そうだ。

「それに……それが本当なら、僕もたいがい馬鹿かもしれない」

「え？」

レオが自分自身を馬鹿なんて言うのは初めてで、その顔を見上げると眉をひそめてまるで何かを悔やんでいるような顔をしていた。

「僕は、キーリが僕のことを恨んで魔法をかけて、それで終わりだと思っていたから。キーリが呪いを解くために何かしていたなんて考えたこともなかったし。それですっぱり忘れ去られるものだと思っていたんだよ」

『レオ、あなたのことを忘れたことなんてない』



突然響いた第三者の声に目を向けると、黒い髪にミリーと同じ琥珀の瞳。そして今ミリーが来ているのと同じローブを羽織った女性があった。

見間違えるわけもない。たった2月ほどの付き合いしかなかったけれど。忘れるわけもない。

「……キーリ」

ミリーとよく似た面差し。違うのは唇にひかれた紅の鮮やかさか。いつまでも化粧つけないミリーと違い、キーリは出会ったときすでに大人の女だった。

ミリーにとっても予想外の事態なのか、自分によく似た女性の出現に目を丸くしている。

『レオ。ごめんなさい』

「君に謝られると変な感じだな」

『仕返ししてやろうと思っただけで、さすがにここまでやるつもりはなかったわ。せいぜい10年くらい閉じ込めてやるだけのつもりだったの』

「……………」

十分ひどい、と思った。

『あたしが生きている間にはどうにも出来なそうなの。でもこの魔術は、呪いがゆるむ頃に発動するようにしてあるから、これを聞いている時には呪いを解くこともできるようになっているはずよ』

さっきのひびがきっかけということか。

『呪いを解くための研究結果をお師匠様に預けたから、もう少しで弟子の誰かが時に来てくれるはずよ。それまでここで待っていてください。きつと、元の世界に戻るから』

「……弟子より先に君の子孫がなんとかしようと頑張ってくれてるんだけど」

『本当にごめんなさいね。レオ』

一方通行な会話は始まりと同じくらい唐突に、キーリの姿とともに終わった。過去を映したものだのだろう。ぽかんと口を空けて見ていたミリーは、ようやく我に返ったようにゆっくりと息を吐いて、キーリがいた場所に駆け寄って誰もいないことをわざわざ確認した。

「あれがキーリなんだ。魔法ってすごいんだね」

「すごいって……あれくらいなら魔女ならできても違和感ないよ」

「そうなんだ。あたしも出来るかな」

「修行すればできるようになるんじゃないかな？」

僕に魔女のこととは分からないけど。

「さっきのキーリの言葉からすると、やっぱり今なら呪いが解けるってことだね！」

「ついでに言えば、少し待てばちゃんとした研究結果を持ったしっ

かり修行したやつが解いてくれるとも言ってたね」

つまり、何もやらないで待つ方が安全なわけだ。

「んー……」

ミリーは、考え込むように下を向いたが、すぐに顔を上げた。

「あのね、あたしもお母さんに聞いて知ったんだけど、4、50年くらい前、国が全面的に魔法を禁止してたんだって。うちに魔法が伝わってなかったのも使えると危なかったからあえて伝えなかったらしいの。だからキーリの残した本もほとんどなくなっちゃったの。最近になってまた研究されるようになったらしいんだけど」

魔法を禁止しようとする動きは確かに僕の記憶でもないわけではなかった。

「つまり、キーリの研究はそのときに失われて伝わっていない可能性が高い？」

「そうそう。それでなくても、もしかしたら忘れられちゃってるかも」

……否定できないのが辛いところだ。

「結局、君に任せるしかないのかな」

「うん、任せて！」

木の枝を握って笑う姿を見ると今さらだが不安がこみ上げてきた。



実は、キーリの残した書物から分かったことは4つある。そしてその4つ目はむやみに期待させたくなかったからあえて言わなかった。

4. 異界では時間の流れが現実とは異なること。異界に入りこんだものが奇跡的に出てくることができた場合に、遙か過去から来た者。また未来から来たと思われる者がいること。

つまり、上手くすればレオが呪いをかけられた時にまで遡ることができるかもしれない。

私が家で飲んで来たのは、レオにも飲ませた『狭間に入ってもそこに馴染んで帰ってこれなくなるのを防ぐため』の薬と、あとひとつ。

飲んだものの魔力を一時的にでも飛躍的に高めるもの。加えて、ローブの下にはお小遣いで買ったものと、家の中から掘り出した魔法具を付けられる限り付けている。

だから、きっと大丈夫。

「ミリー」

ぴと、と頬に冷たいものが当たり、ひあ、と変な声が出た。

「もしかして思ったら、やっぱり触れるんだね」

「い、いまは同じ狭間にある存在だから、そりゃあ触れるよっ!」
レオに触れたのは当たり前だけど初めてで、妙にうろたえてしまう。

「へえ。人に触れるのは何年振りだろう」

でも、そんな私の心境に構わずレオはベタベタと頭をなでたり頬を触ったりしてくる。

「れ、レオ! 昔さんざんあたしのことを礼儀しらずって言ってたくせに、女の子にそんなにべたべた触って良いと思ってるの!？」

「おっと失礼」

ぱっ、と手を離されてようやく落ち着けた。

「よろしくね、ミリー」

「う、うん」

ばくばくとうるさい心臓を押さえて、あたしは準備を始めた。頬が熱い。



また魔法陣にいくらかの線や意味のわからない文字らしきものを書き加えた後、ミリーは呪文を唱え始めた。これでなんらかの結論が出るのだと思うと、感慨深いものがある。ただ一つ不安があるとすれば、これが失敗したときミリーは大丈夫だろうかということだ。今頃そこに行きあたるなんて、どれだけ余裕がなかったのかと言う話だ。

「……ミリー」

止めてもいいよ、というにはもう遅いだろう。

ミリーには、呪文が唱え終わると同時に鎖が切れるはずだと言われている。そして元の場所に戻れると。

杖の代わりに木の枝を構えているというのに、この身を感じる魔力はキリーに呪いをかけられた時に感じたのものと遜色ない。鎖もどんどん軽くなっていくのが分かるし、周囲の光景も何だか違うものになっていく気がする。これなら大丈夫かもしれない。

冷や汗がミリーの顔に浮かんでいる。初めてであったときは暇つぶしにからかっただけだった。しかし何度も会ううちに、この状況を願うようになっていった。そして今、それが叶おうとしているのにこの身を感じる恐怖は何だろう。不安とも違う、どこか確信に似た恐ろしさが胸にあった。

ふいに、先ほどまでキリーのいた場所に再び、像が結ばれた。キリーだ。

『そうだ、あんたを繋いだ木の根元に色々埋めておいたから慰謝料代わりってことで勘弁してね。あ、あと研究してて、そこそ魔力がある人の魔力を代償に時間を上手く操ればあんたが本来生きていた時代に戻るかもしれないことがわかったわ。ただ色々矛盾とか起こるので本当に魔力が大きそうな相手じゃないと死んじゃうかも！ 頼むならダメ元でね！』

「……は!？」



魔法を勉強するのに一番困ったのは呪文だ。魔法としての意味を理解しながら魔力を込めて発音しないと発動しない。幸い、薬草づくりの時に決まった言葉を呟くのに似ていたから出来るようになったけど、長く続けるのは疲れる。

「あたしは魔女・ミリー。キーリの後を受け継ぎしもの、呪いよその式を解けよ!　そして世界の時よ、この者——」

あたしは思い出す、初めて会った時にレオが微笑みながら教えてくれた名前を。何度も何度も声に出して紙に書いた。覚えられなくて泣いたし泣かされた。

今ではレオと呼ぶけれど、いつだって流れるように言えるようになったレオの本名。

「レオナルド・リオッド・マクスライン・レレンダー・オズドル・ワズイルダムを、あるべき時へと——」

レオの鎖が完全に消滅したのを確認しながら、最後の呪文を続ける。これで終わりだ。この呪文さえ唱え切れれば——。



僕は咄嗟に掛け出した。頭の回転が速くてよかったと思う。キーリの言葉を理解するのと、鎖が消えたと感じるのと、そして周囲の光景が変わりつつあるのが時間が巻き戻っているからだと気付くのは一瞬で足りた。

駆け出し、そして懷から取り出した銀の短剣で——ミリーが掲げるように持っていた木の枝を叩き折った。



32回目

魔女は強力な魔法を使うときには必ず杖を使うのよ、とは僕と彼女が上手くいっていた本当に短い期間に教わったことだ。それを聞いて、僕はすぐに破魔の効力を持つという短剣を取り寄せた。念のためと言うやつだ。

残念ながら、呪いについてはその限りではないのだと後から知ったが持つだけなら損にはならないだろうと持ち歩いていた。呪われてからは木に傷を付ける程度の役にしか経たなかった短剣だが、こんなところで役に立つとは思わなかったよ。

見覚えのある木の下で、目をつむって横になっているミリーの髪をなでると。その拍子に、ミリーはがば、と起き上がり周囲を見回した。

「い、今いつ!？」

「やあ、おはようミリー。今は朝だよ」

朝露に光る葉。きらめく太陽。呼吸すると胸いっぱいになるかぐわしい空気。そして自由に動く手足。生きてるいることの素晴らしさを感じるには一番いい時刻だ。

「レオ、そうじゃない、そうじゃなくて」

混乱しているのだろうミリーに、見飽きるほど見飽きた木を示してやる。

「これを見て御覧、ミリー。この木の、そう、下の方だ」

「……線？」

「そう。これは僕が暇つぶしに君と会った回数を記したものだ。30回」

そして、もう一本線を引く。

「魔法を解きに来た時で31回目。そして、さっきまで君も僕も気絶してたからあえて32回目と数えておこう」

もう一本。

「ミリー。今は君が生きる世界だよ。君と僕が会話をして、流れた時間そのままのね」

琥珀色の瞳に涙が盛り上がった。そして泣きだす。

「れ、レオっ。な、なんで止めたの」

「君が死ぬかもしれないって聞いて止めない方がおかしいよ。君、やっぱり馬鹿だよ。馬鹿だ馬鹿だと思っていたけどそこまで底なしの馬鹿だとは思わなかった。救いようがない馬鹿だよ」

「え、死ぬ!？」

驚いた顔にむしろこっちが驚いた。

「分かってなかったの!？」

「ま、魔力が全くなくなっちゃうかとは思ってたけど……し、死ぬとか考えてなかった……」

茫然とした後に怖くなったのか折れた枝を持った手で自分の体を抱きしめる。

「だ、だってそんなの書いてなかったし」

「それはたぶん、完成した研究資料じゃなかったからだろうね。君が呪文を唱えている最中に、キーリがまた出てきて言っていたんだよ」

「気付かなかった……」

かたかたと震え始めた体は冷たい。ローブだけでは足りないのかと上着を脱いでさらに掛ける。気絶している間は脈拍も息も正常だったから大丈夫だろうと思ったが、魔女ならではの症状もあるのかもしれない。

「ミリー、とにかく君の家まで行こう」



それからの記憶はほとんどない。気が付いたらあたしは自分のベットのの上に寝ていた。

お母さんには怒られた。お父さんには泣かれた。でも、お母さん

があたしを怒ると、レオはそのたびに頭を下げるから、そのうち怒らなくなった。さすがにいかにも上流貴族という雰囲気、レオを怒り続けられないみたい。

あたしはどうか魔力の使いすぎ？で重度の貧血のような状態になっていたらしくて3日くらい経つと普通に動けるようになったけど、しばらくは寝ているように言われてしまっただけで、普段の生活に戻れたのは一週間後のことだった。

「レオ、馴染んだね……」

「そう？」

そして動けるようになったあたしが見たのは、いつになく繁盛しているお店と、お父さんの服を着て店番をしているレオの姿だった。「旅の途中でレオナルドさん、森に迷いこんじゃったんだってねえ？」

「あの森は昔から不思議な伝説が多いからもう」

「でも、そのおかげで毒キノコをうっかり食べちゃったミリーを連れ帰ってくれたんだから、レオナルドさんもミリーも運がいいよねえ。なにせあの森はミリーかケティがいないとちゃんとした道が分からないからねえ」

思わずレオを店の奥に引っ張り込む。

「なんであたしが毒キノコ食べたってことになってるの！？」　あたし、そんな危ないもの食べたりしないのに！」

「でも、当たらずとも遠からずだよ。なにせ死ぬかもしれない魔法を使おうとするんだから」

「う、しょ、しょうがないじゃない。書いてなかったんだもん」

「そんなの知らなかったから毒キノコ食べた、と変わらないよ。そうでなくても、僕に一言言ってくればそんな危険を冒さずにすんだんだよ。僕は時を戻すことなんて望んでなかった」

すまして言われた言葉に、思いのほか衝撃を受けた。

「なんで……？　だって」

「僕はね、後悔してないんだよ。キーリを騙したことも、それで呪

いをかけられたことも、それであれだけ苦しんだことも、僕が僕の判断で動いてきた結果だ。なかったことにしたくない。僕はあの時間を経て、今ここにいるんだ」

それにね、とレオは言った。

「キーリがあ言葉を残したということは、僕は戻らないままに今まで時間は流れて来たんだ。それなのに僕みたいに影響力のある人間が戻ったら、それこそ歴史が変わるかもしれない。誰かの経験や行動がなかったことになってしまいかもしれない。僕はそうすべきではないと思う」

「でも、でも、レオ、誰もいないんだよ？　レオの知っている人、誰もいないんだよ？」

「いるよ。この村に人たちはみんな僕のことを知ってる。隣の村の人だって知ってるかもしれない。なにせこの容貌だからね、噂になりやすいんだよ」

茶化してにやりと笑うレオの顔には影が見えなかった。

「それに、君みたいに僕のために頑張ってくれた子もいるしね。――キーリが言っていたんだ。人を好きになるには一瞬で十分だし愛するには、1か月あれば十分だって。僕はそれを笑っていたけど、あながち間違っていないんだと思ったよ」



「あ、愛!？」

「ま、正確には1か月じゃないけど会話した回数から考えても、僕の体感だと1カ月ちょっとくらいだし」

「違うよ！　1か月じゃないよ！　初めて会ってから10年は経ってるよ！」

「愛は否定しないの？」

「う……愛じゃないもん、でも……大事だよ」

顔を真っ赤に染めながらそう言うミリーを見ながら、初めてミリー

ーと出会った時のことを昨日のように思い出す。単純で可愛い女の子。

いざ生き伸びても、生きていく気力が自分にあるのか疑問だった。でもそれは杞憂だった。

「ミリー。僕も、君が大事だよ」

柔らかい頬を撫でてやると、簡単に熱を持つ。可愛い。

「さて、元気になったならちょっと付き合ってください？ 森にいてキーリが僕に残したって言う慰謝料を掘り返しにいかない？」

「え、なにそれ!？」

「さていくらあるかなー、楽しみだなあ」

「ちよっと、慰謝料？ ねーってば!」

ミリーの手を引きながら歩く。

王子としての僕の居場所はもうどこにもない。

でも、貸してもらった服は地味だけど肌触りは悪くない。髪も手入れ出来ずに痛んできたけどあまり気にならない。力仕事だって自分がいなければ誰もしてくれないけど、体を動かすのは思ったより楽しかった。村人たちはなれなくて礼儀がなっていないけれど、どこの誰とも知れない僕を受け入れてくれている。それに、この途方もなくお人よしな少女もいる。

「ミリー」

「何?」

「商売人、向いてるかな、僕」

「おぼさん達には受け良かったから、向いてるかもね。レオがちやんと接客できるなんて思わなかった」

「得意分野だよ。じゃあ、頑張ってみようかな」

FIN

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3606s/>

僕の魔女

2011年8月6日03時17分発行